
アイヌ民族博物館だより

THE AINU MUSEUM

1998. 12. 31

No. 40



屋根の地組

チセづくりの最大の特徴のひとつとされるのが、屋根の地組である。通常の建築物のように、柱を立てて、その上で屋根を組むのではなく、先に地上で屋根を組み、柱を立てて屋根をのせる。屋根を柱に上げることをチセブニ（家を持ち上げる）という。（ pp. 2-5）

完成したボンチセ

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 平成10年度
アイヌ生活文化再現マニュアル作成事業（受託事業）



アイヌ民族博物館は今年度、(財)アイヌ文化振興・研究推進機構の委託を受け、アイヌ生活文化再現マニュアル作成事業「チセ建築編」を実施中である。この事業は、アイヌの生活の本拠である住居(チセ)の伝統的な建築工程と儀式を再現可能なようにわかりやすくマニュアル化するというもので、ニカ年事業の初年度にあたる今年度は映像マニュアル、次年度は活字マニュアルを作成する。

映像マニュアルは実写映像を中心に、一部CGや文献等の資料映像を交え、約60分のビデオソフトとする予定である。実写映像を収録する都合上、実際にチセを復元する必要があるが、1997年のポロチセ(大きい家=当館の復元家屋)建設をはじめ、数々のチセづくりの実績をもつ当館が実作業にあたることになった。

一口にチセと言っても、地方や時代によって大きな違いがある。今回の事業では、復元するチセの規模や時代・地方の想定等、内容に関してはすべて当館に一任された。当館では従来、非常に大規模なチセを、重機、電動工具を含む現代的な手段を用いて建設してきた。これは来館者の収容力、安全性、あるいは作業効率等を考慮してのことだが、伝統的なチセとはかなり隔たったものであったことは否めない。

ただ、今回私たちが製作するマニュアルの利用者は、シナ縄より釘を入手するほうがはるかに容易な現代人である。また、「生活の本拠(住居)としての需要はすでになく、今後は当館ポロチセのような「アイヌ文化伝承活動の本拠」として多目的に利用可能なチセが望まれるとするなら、当館の従来の方法を踏襲することも選択肢のひとつになりえた。

しかし、ポロチセ建設ですでに詳細な記録を得ていた私たちは、今回、従来の慣れ親しんだ方法をあえて捨て、規模、材、工具、工法等、すべてにわたって伝統的なチセづくりを目指した。復元チセの規模は、12畳相当の母屋に2畳相当の玄関兼物置(モセム)が付属する程度の小規模家屋(ポンチセ)である。昔の平均的な

チセと比較しても若干小さめと思われる。この周囲に、食料庫(ブ)、熊檻(ヘペレセツ)、便所(アシシル)、物干し(クマ)、祭壇(ヌサ)などの付属施設を併設することにした(表紙写真下)。

また、チセ本体に関して釘や金物は一切使用せず、工具は鉋、斧などに限定し、結束にはシナノキの内皮を縛った縄、ヤマブドウの蔓などを用いた。当館職員にとってもまったく初めての試みだ。参考にすべきチセもほぼ現存しない。頼みは文献だが、細部に関してはもちろん、かなり基本的な工程についても不明な点が多く、結果的に試行錯誤の連続となった。マニュアルという「お手本」をつくる事業としては不手際も多々あったかと思われる。しかし同時に、あえて安直な手段によらずに厳しい条件を自らに課したことによって、貴重な経験を得ることができた。事業委託者のアイヌ文化振興・研究推進機構をはじめ、関係各位に深く感謝したい。

さて、ポンチセ建設は11月4日に着工、同月25日に竣工となり、ビデオ・写真・音声の収録は終えている。詳細は事業の成果品となる映像・活字両マニュアルに譲るとして、本稿ではチセブニを中心に紹介し、速報としたい。

屋根の地組

チセの建て方の最大の特徴のひとつとされるのが、屋根の地組である(写真1)。通常の建築物のように軸組(柱) 小屋組(屋根)と、下から上へ組み上げるのではなく、小屋組 軸組の順、すなわち先に地上で屋根を組み、柱を立てて屋根をのせる。屋根を柱の上に上げることをチセブニ(家を持ち上げる)という。『蝦夷生計図説』¹にも描かれた古い方法である。

しかし、アイヌのチセは必ずチセブニしたというわけでもない。人手で持ち上げるため、建物の規模には必ずと限界がある。当館のポロチセのように、2mを超える柱の上に数トンの屋根を持ち上げることは不可能である。また、道東美幌や伏古では、チセブニはしなかったとい

う聞き取りもある²。チセブニする地方でも、小屋組だけ地上で行う場合や、屋根葺き作業の一部も地上で済ませる場合など、様々な異なった記述が見られる。

なぜ地上で先に屋根を組むかといえば、いうまでもなくその方が作業が楽だからだ。チセに限らず、家の一部分をあらかじめ地上で組み立てる工法は珍しくない(現代のパネル工法など)が、アイヌのように小屋組全体を地組し、しかも人力で建て込むのはかなり稀な例だろう。

これには、足場や工具の時代的制約も関係する。当館では従来、金属製の組立式足場を使用してきたが、このような簡便かつ堅牢な足場を使用するなら高所作業は容易であり、地組の必要は感じない。『蝦夷生計図説』や鷹部屋福平『アイヌの住居』³には足場の図が残されているが(図1)、現代人のイメージする「足場」からはほど遠いものである。このような足場しかなかったからこそ、チセブニが必要だったともいえる。

また、垂木などの木材を屋根上で切断するのはかなりの困難を伴う。^{のこ}鋸を使えば簡単だが、^{なた}鉋など「叩き切る」タイプの刃物は、地上でなければ使いづらい。このようなかつての工具の制約も、チセ建築が地組を必要とした理由の一つかと実感した。

チセブニ初体験

さて、11月15日、チセブニの当日である。「午後2時チセブニ開始」とすでに報道各社・関係機関に案内済みであり、当地では数十年ぶりとなるチセブニを一目見ようと、定刻前からテレビカメラや新聞各紙、大勢のギャラリーも陣取っている。準備万端整って……と云いたいところだが前工程で手間取り、定刻を過ぎてようやく軸組の工程、つまり柱材の加工と柱穴掘りに着手。その後は時間との戦いとなった。

さて、小屋組を組み終わった段階では、地上に小屋組が置かれているだけで、まだ柱は立っておらず、柱穴も掘ってはいない(表紙写真)。地上では小屋組に加えて、屋根葺きの下地となる茅すだれ(アクツポクンペ)、および一部の屋根葺き作業など、重量の許す範囲で作業を進めておく(写真2)。

柱穴は小屋組が地上にある関係上、桁・梁の

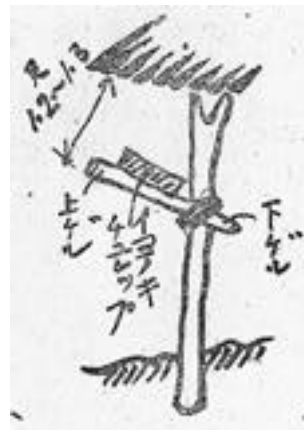


図1 アイヌの足場
(鷹部屋福平『アイヌの住居』より)



写真1 屋根の地組



写真2 地上での屋根葺き

真下には掘れず、その外周に掘る(写真3)。ここに柱を立てて小屋組をのせる。従って、必然的に柱は垂直には立たず、外踏ん張りとなる。チセは軸組に筋交いなどの斜材を一切用いないため、柱の外踏ん張りがチセの安定に一役買うと言われている。

しかし、それだけの理由なら、柱の傾斜は3度もあれば十分だが、古い時代には近年より傾きが大きかったとする指摘もあり、実際、日高管内平取町のイルエカシ遺跡の発掘例

(1600年ごろ。7号建物趾の場合)では、柱穴は最大で21度、平均で9.7度内倒している⁴。とすれば、結果的に外踏ん張りになっているのではなく、最初から家の安定を意図した構法だとも考えられる。

また、今回私たちは四隅だけに柱を立て、チセブニ後に間柱を足したが、こうした実施例も確かにある。一方で、『アイヌ民族誌』⁵に紹介されている方法では、隅柱4本だけでなく、チセブニ前に長辺の二列の隅柱・間柱をすべて立ててしまい、片方の柱列はあらかじめ倒れないように埋め固める。そこに屋根の一边を上げ、他辺に柱をあてがって調節した後、柱を埋め固める。倒壊の危険、人員の有効活用を考えると、理に適った方法といえよう。

一本一本の柱の立て方についても文献によって差が大きいがおよそ次のようなものである。

- ① 柱材は末口が二股になったもの、あるいはV字に切り込んだ丸太柱。
- ② 元口は尖らせ、根焼きする。
- ③ 貝殻で柱穴を掘る。
- ④ 柱を突き刺す。

今回のチセ用地は、湖畔の埋め立て地で地盤が軟弱だったため、やむなく一部異なる方法を採用した。

- ① あらかじめ柱の地下70cmに基礎(電柱)を埋設し、埋め戻す。
- ② 小屋組後、改めて柱穴を貝殻で掘る(映像用=写真)。
- ③ 柱穴の底部(すなわち電柱の上)に礎石を置く。
- ④ 元口を尖らせず、根焼きした柱を立て、埋め戻す。

両者の最大の違いは、ひとえに「柱が沈まない」点にある。これは先述のように地盤対策として意図したことなのだが、これが仇となった。掘って立て柱は、適度に沈まなければならないのである。

チセに関する代表的な文献、鷹部屋福平『アイヌの住居』には、「イクシベ(=柱)の先端は削ってとがらしてあるので、掘った土の穴に二回位どしんと突込めばそれで柱は充分入り込む。後は屋根の自重でしまるので、打ち込む様なことはしないのである」⁶とある。「たとひ、地質が火山灰のところであっても、風吹けば、



写真3 小屋組の外周に柱穴を掘る



写真4 チセブニ(家を持ち上げる)



写真5 柱を立てる



写真6 チセブニ後のチセ

土中にだんだんと食ひこんで行った。ころぶ心配はなかった」⁷とも。基礎は深いほど安定するのは明らかだが、柱が沈めば手掘りの限界の深さ（地下70cm程度）を超えることが可能であり、それによって柱はよりしっかり立つ。

一方、柱が沈まない構造の場合、桁や梁を支える柱が隅柱2本だけのうちは何とかなっても、チセブニ後、間柱を立てて支点が3箇所以上になると、一部の柱が宙に浮いて遊びが生じ、桁・梁の納まりが悪くなる。柱穴に土を入れるなどの調整も効果薄。文字どおり「あちらを立てればこちらが立たず」となる。この点でも柱が沈めば最終的に多少の遊びは調整され、すべての柱に均等に屋根重量が伝わるだろう。

今回の方法のもう一つの問題は、基礎を埋設したことにある。本来の方法では、地上に置いた小屋組の底辺、すなわち梁・桁からなる四角形がすべての基準となり、あとは成りゆきで寸法が決まる。ところが、地下に基礎をあらかじめ埋設する場合、柱を垂直に立てるなら基礎の真上に桁・梁を組めばいいのだが、あいにくアイヌのチセは柱が内倒する。基礎から柱の傾斜を逆算して、しかも地表面ではなくチセブニ後の位置で桁・梁の寸法を割り出さなければならぬ。さらに、基礎を埋めた位置が分からなくなったりすると、もう目も当てられない。この計算を担当したのは実は私なのだが、建築は適材適所が原則。この人選ですでに結果は見えていた。穴を掘っても肝心の基礎が見つからないのである。チセは素朴な建物。下手な小細工は禁物である。

さて、柱の根焼きや穴掘りも何とか終わり、あとは持ち上げるばかりである。しかし、ギャラリーは多いが、持ち上げる男手がない。文献等に見られる代表的な方法では、

- ① 長辺の片側を途中まで上げて臼をあてがい、柱に縄で吊して固定。
- ② もう一边を柱上まで上げ、
- ③①で臼にのせた一边を屋根上まで上げて完了の3工程のはずが、この人数では重すぎて辺ごとには上げられない。やむなく角ごとに少し持

ち上げては臼をあてがい、少しあげては臼の上に丸太を積み木し、積み増す物がなくなって途中で三脚を作って支え、それが折れて二脚となり……と、何工程経たか数えきれない大苦戦。映像マニュアルのカメラマン氏が「このまま掘り続けてもアクシデントが起きたとしか映りませんが……」と心配するも、実際アクシデントなのだから仕方がない。中止しようにも、衆目注視の中とあっては後には退けない。当のギャラリー諸氏は初めて見るチセブニに、これがアイヌのチセブニか、いずれ上がるだろうと信じて疑わない様子。いや、私たちもその瞬間まで奇跡を信じたかったのだが……やはり奇跡は起こらなかった。テレビカメラの注視する中、哀れ我らがボンチセはそのフレームから消えた次第である。

見事失敗である。こうして私たちのチセブニは「伝統的なチセブニ」の看板を下げ、ついに重機の世話になった。原因を挙げればきりが無い。事ここに至っては負け惜しみ以外の何物でもないが、たった四本の柱に1トン近い重量の屋根があがった様は、私には立っているほうが不思議に思えた。柱は多少は内倒しているとはいえ、筋交い等の斜材を一切使用しないため、水平の力に対しては見るからに弱い。翌日、間柱を立てる段階で再び傾きはじめ、氷雨の中、再度基礎を掘り直すという大がかりな修正作業を余儀なくされた。チセの軸組は、要は一本一本の柱がしっかり立っているかどうかすべてであり、そのためには柱は多少は沈まなければならない、柱穴は可能な限り深くしなければならぬ、というのが教訓である。

それとは対照的に、チセブニの失敗で小屋組は地上1.8mから地上へ転落したが、まったく損傷がなかった。金物を一切使わず、ごく単純な仕口、シナ縄とヤマブドウ蔓だけの結束にもかかわらず、である。このような実験は後にも先にも二度とないだろうが、先人の知恵とはこうしたものかと、これまた妙に感服した次第である。

(安田 益穂)

1 秦檜鷹撰，村上貞助，間宮林蔵増補，1823
2 北海道教育庁社会教育部文化課編『昭和61年度 アイヌ民俗文化財調査報告書（アイヌ民俗調査Ⅳ）』1986，p.57，pp.105-107
3 彰國社，1943

4 鶴丸俊明編『北海道平取町 イルカシ遺跡』，平取町遺跡調査会，1989
5 アイヌ文化保存対策協議会，1969，p.190
6 p.35
7 pp.46-47

ロシア民族学博物館におけるアイヌ資料調査

国際的なアイヌ資料調査は、1980年代以降、主としてヨーロッパやアメリカで実施され、収蔵先や数量、収集の経緯などの詳細な調査によって、その全容が明らかになりつつある^{註1}。

今回、筆者が参加した調査は、千葉大学の荻原眞子教授を研究代表者とする、文部省科学研究費補助金平成10年度国際学術研究の「第2次在ペテルブルグ博物館アイヌ資料の民族学的研究」によるもので、ロシア民族学博物館に収蔵されているアイヌ関係資料調査の2年度目である^{註2}。

サンクトペテルブルグは、1991年9月までレニングラードと呼ばれていたロシア共和国第2の都市である。市内の10%が水面で、運河が縦横に町の中を巡っており、メインストリートのネフスキー通りは200年以上も前に建てられた石造建築物が立ち並び、18世紀のヨーロッパの雰囲気を漂わせている。パリのルーブル美術館と並び日本でも有名なエルミタージュ美術館もある、史跡や博物館の多い文化的にも歴史的にも素晴らしい町である。

ロシア民族学博物館は、ネフスキー通りからやや奥まった芸術広場の詩人プーシキンの記念像を背にロシア美術館と並立している。博物館の裏手には夏の庭園、ミハイロフ庭園が広がり、環境豊かな場所に位置している。

19世紀末にアレクサンドル三世ロシア民族学博物館として建築計画が立てられるとともに、資料の収集が始められ、ロシア国内を中心に150以上の民族に関する資料が収蔵されている。

アイヌ資料も、2,000点以上を数え、その多くは1910年代に北海道とサハリンで収集されたものである。中心をなす資料は、1912年8月31日から9月6日までの7日間にわたり北海道を訪れたワシーリエフ^{註3}が、沙流地方で収集した791点の資料である。この時の案内役は、当時、北海道庁に勤務していた河野常吉^{註4}で、復命書の控えには次のようにある。

「...九月一日、平取に赴き、...アイヌ二戸につき実況を視察し、器物購入。二、三、四日は

旅館にあってアイヌの持参する物品を購入、また注文して求め、また部落及び墓地を巡視して撮影。五日、二風谷村に赴き、器物の購入を兼ねて撮影。...河野常吉が、購入価格を標準概定をもとめられ、樺太における購入価格、沙流地方の状況を斟酌して判断している。アイヌが持参し申出た価格が高いときは低減、低すぎるときは増加する...夜十二時頃までかかり、購入品の整理に従事し、一々帳簿にアイヌ名及びその用途を記入し、現品に札を付す...」（石村義典著『評伝 河野常吉』1998）

これにあるように、ワシーリエフは、民具資料の収集と写真撮影をおこなっており、その際、アイヌ語名称や使用方法の聞き取り調査もしている。また、資料の価格については、アイヌ側からの提示があり、購入者側の一方的な価格設定ではないということも読み取れる。

ロシア民族学博物館の展示室には、エヴェンキやウリチなど各民族の資料が豊富に展示されているが、アイヌ資料を扱う専門の職員がいないことから、残念ながらアイヌの展示はない。

アイヌ資料は、衣服や木製品、楽器、大型なものなど種類別にいくつかの収蔵庫に保管されている。

本調査は、3カ年計画で進められており、1年目の1997年は衣服などの服飾品を中心とした約600点の資料の調査を終了し、2年目の1998年は8月21日から9月12日までの3週間にわたり儀礼用具や調理具、食器、織機など木製品を中心に約1,000点の資料調査をおこなった。1,000点といっても資料番号に複数の枝番号がついているものもあることから、今年度調査した資料の総点数は1,200点を超える。

調査は、博物館の資料台帳の記載内容から、資料名や収集年などの基本データを転記し、日本語訳を付し、計測と写真撮影をおこなうという手順が進められたが、資料番号の順ではなく、収蔵庫の棚ごとにおこなわれた。昨年の調査に続く通し番号を付した調査票に資料番号を書き込み、資料の判別がしやすいように白黒のポラ

ロイド写真を撮り、調査票に貼り付ける。ロシア民族学博物館の研究員3名が調査票に、資料台帳よりロシア語で記載されている基本データ（資料のアイヌ語名・資料の用途・収集者・収集年・収集地等）を転記し、日本側のスタッフが転記したデータに日本語訳を付けた。調査票には基本データの他にスケッチや実測図に加え、計測値・材質・資料の劣化状態などの観察データを書込み、資料写真の撮影をおこなった。写真は35mmネガフィルムとブローニー版（6×7）ポジフィルムで、35mmネガフィルムは、帰国後、現像とともにラッシュでポジフィルムも作成した。調査資料は、儀礼用具であるイクニシ、イクパスイと呼ばれる捧酒箸、チェペニパボやシカリンパハと呼ばれる椀や盆、皿、杓子、匙などの食器や調理具がその大半を占めた。その他、小刀や煙草入れ、箆や籠などの織機、紡錘車、キテやマレクと呼ばれる鉢や小動物用の罾などである。それらの木製品には美しい彫り文様や装飾を施したのから、実用的で機能的なものまでさまざまなものがある。

この2年間で調査した約1,600件の資料データや写真資料は、現在、千葉大学と北海道立アイヌ民族文化研究センターを中心に、整理作業が進められている。ちなみに、3年目である1999年度は、熊の檻や犬檻などの大型のものを含めた民具資料約400点、写真資料の複写及び前2年間の調査の補足調査をおこなう予定である。

註1：国際的なアイヌ資料調査は、1983年からボン

大学教授クライナー・ヨーゼフ氏を中心としてヨーロッパの資料が、1990年からは名古屋大学教授小谷凱宣氏を中心としてアメリカの資料の調査が実施された。

註2：サンクトペテルブルグでの第1次調査は、1995～1996年の2年間にわたりロシア科学アカデミー人類学民族学博物館においておこなわれ、約1,400点のアイヌ資料の調査がなされた。1998年3月に報告書が刊行されている。

註3：ワシーリエフについての詳細は、現在のところ不明であるが、河野常吉が道庁に提出した復命書によると「露国聖彼得堡歴山第三世博物館員ワシーリエフ氏」とあることから、ロシア民族学博物館の命を受け資料の収集にあたっていた人物である。

註4：1862年、長野県松本市生まれ。北海道史研究の草分けであったが、その研究は歴史の分野だけにとどまらず、考古、地理、生物、気象など多方面に及んでいる。また、コロボックル論争などアイヌ研究においても著名である。河野常吉とその次男広道によって収集された考古資料、アイヌを含む民族資料は「河野コレクション」と呼ばれ、現在、旭川市博物館に収蔵されている。



ロシア民族学博物館外観写真（パンフレットより転載）

（村木 美幸）

【在サンクトペテルブルグアイヌ資料調査参加者】

《1997年度 11名》

荻原 眞子 千葉大学
 児玉 マリ アイヌ民族博物館
 小谷 凱宣 名古屋大学
 佐々木利和 東京国立博物館
 長谷部一弘 市立函館博物館
 古原 敏弘 北海道立アイヌ民族文化研究センター
 鈴木 邦輝 名寄市北国博物館
 内田 祐一 帯広百年記念館
 大谷 洋一 北海道立アイヌ民族文化研究センター
 藪中 剛司 静内町郷土館
 小泉 健 モスクワ大学

《1998年度 10名》

荻原 眞子 千葉大学
 古原 敏弘 北海道立アイヌ民族文化研究センター
 福士 廣志 留萌市海のふるさと館
 鈴木 邦輝 名寄市北国博物館
 出利葉浩司 北海道開拓記念館
 吉田 睦 ロシア科学アカデミー人類学民族学研究所
 大谷 洋一 北海道立アイヌ民族文化研究センター
 藪中 剛司 静内町郷土館
 小泉 健 モスクワ大学
 村木 美幸 アイヌ民族博物館

アメリカ合衆国における 「アイヌ民族巡回特別展示会」展示協力（中間報告）

1999年4月29日より、スミソニアン研究所アメリカ合衆国国立自然史博物館（ワシントンD.C.）が主催するアイヌ民族巡回特別展示会“Ainu: Spirit of Northern People”（アイヌ：北方民族の精神）が開催される。

この展示会開催のきっかけは、1990年から92年にかけて、小谷凱宣名古屋大学教養部教授らの研究グループによって、北米各地の研究機関に保存されているアイヌ関係資料の所在が明確にされ、さらに民族学的に重要な資料として位置付けられたことが大きな要因となっている。また、これと同時期に国立自然史博物館で開催されていた特別展示会「大陸の十字路」（1988～92）にも関連している。同展示会はベーリング海峡を北米大陸とユーラシア大陸の文化交錯の地としてとらえたもので、当時、アイヌ民族も含む計画であった。しかし、北方領土問題で神経質になっていた旧ソ連によって拒絶され断念した経緯がある。同展示会を企画した極北研究センター所長ウィリアム・フィッチャー博士にとっては、今回の展示会は、この時、実現できなかった願望のアイヌ展示となる。

小谷凱宣教授らの調査によると、国立自然史博物館には、ケブロン、ライマン、ヒッチコックらの収集による約190点のアイヌ資料が収蔵されているが、このうちの約130点はヒッチコックの収集によるもので、彼が、1888年、北海道を旅したときのものである。因みに、資料の収集地として、平取、浦河、斜里、網走、別海、対雁などの名がある。

北米には、国立自然史博物館の約190点に加えて、アメリカ自然史博物館約430点、ペンシルバニア大学博物館約300点、ブルックリン美術館約800点など、非常に多くのアイヌ関係資料が収蔵されており、これらはいずれも明治期に収集され、しかも収集地が記録されているものも多くある。

今回の展示会は、これら北米に散在している3,000点以上の資料から選ばれた260点を中核

として、日本国内からアイヌ文化に関連した考古学資料21点、民具資料24点、現代のアイヌ工芸家の作品24点加わり、さらに、筆者が制作を依頼された板綴舟の模型、家屋、イオマンテ（熊の霊送り）のジオラマが、各セクションに分かれて展示される予定である。

このような展示構成により、第一会場の国立自然史博物館を皮切りに、その後、北米を巡回し、最終的に2001年4月30日に閉幕される。ただし、現時点ではワシントンD.C.（2000年1月2日迄）以外の開催地は未定である。

筆者は、同展示会への協力のため、1998年5月13日から同年10月30日までの間、展示制作スタッフとして、アイヌ民族博物館からスミソニアン研究所に派遣された。筆者が展示資料を制作したスミソニアン研究所オフィス・オブ・エキシビテス・セントラル（以下、OEC）はスミソニアン研究所の中でも最も大きなサポートセンターの一つで、広範囲にわたる展示会を企画・制作する。ここには40数名のスタッフが常勤しており、巡回展や特別展だけでなく、常設展に関わる仕事にも従事し、スミソニアン研究所の各施設に民間企業よりも低価格で高品質なサービスの提供を行っている。OECの展示会のスタッフは、保存科学的な知識を持ち、学芸員や各テーマの専門家と連携し、教育的な効果や利用において最高水準を満たす展示会を準備する。具体的には、デザイン、エディティング（編集）、グラフィックス、モデルメイキング（模型、マネキン等の制作）、ファブリケーション（棚、展示ケース等を制作）、クレーティング（木枠、密封包装用の箱を制作）、インストール（展示設置）など、展示会における全ての作業を取り扱っている。また、企画開発、展示品の選択、製品開発、試作品のテストなども行っている。スタッフは、また、博物館や美術館における資料の保存科学の必要性を強調し、展示会のデザインや資料の取り扱いなどのトレーニングを受ける義務がある。毎年、

OECはスミソニアン研究所に属する博物館や美術館の他に、全米各地の研究プログラムからの依頼も受けている。

今回の展示協力では、時間的な余裕がなく、彼らの仕事を垣間見る程度であったが、資料の取り扱いや保存に対しての責任の所在、特に、個々の責任においての制作力と限りない創造性の高さは、ある特定のものに執着している人間からは決して生まれてこない豊かさを感じた。展示において、資料は表現の一つであり、忠実な再現も必要であるが、一方では、見学者の心理や理解力を的確に判断し、パフォーマンスへの期待に応える展示行為もまた必要である。展示は博物館の名誉の為ではなく、あくまでも見学者に対して、情報を伝える手段という基本理念のもと、スミソニアン研究所の各施設が運営されている。

最後に、各国の要人や多くの観光客が集まるアメリカ合衆国の首都ワシントンD.Cで、同展示会が長期に渡り開催されることは、世界へのアピールであり、アイヌ民族文化の素晴らしさを知っていただくまたとない機会である。日本においてもアイヌ文化復興の波が高くなることを期待する。

筆者が依頼された制作物については、現時点で完成されたものではないので、展示を見極めてから、改めて報告したい。

(野本 正博)



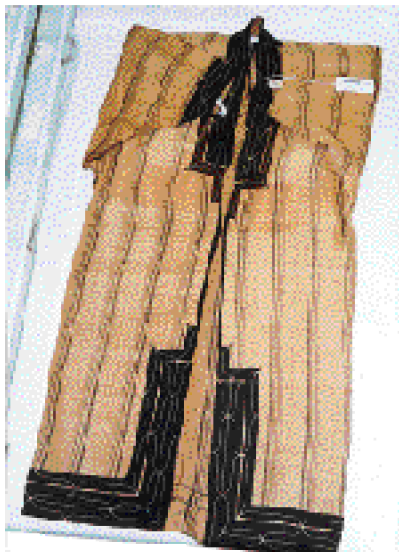
アメリカ合衆国国立自然史博物館



スミソニアンのサポートセンター（収蔵施設）



OECファブリケーション部門



樹皮衣（国立自然史博物館所蔵）



OECモデルショップ部門

博物館短信

平成9年度博物館文化普及事業を下記のとおり実施した。

文化教室の開催

第4回アイヌ文化教室 / 講演会

テーマ：「学校教育とアイヌ文化」

日時：8月5日（水）午後6時～8時

会場：アイヌ民族博物館映像展示室

講師：本田優子（当館学芸員）

参加者：50名

* 学校教育の中でアイヌ民族・文化に関する教育を受けてきた大学生等へのアンケートや、現在の教育現場での実践例および副読本等を資料として用いて、その教育内容に関わる歴史的背景、問題点、今後の課題等について講義をおこなった。

第5回アイヌ文化教室 / 植物講座

テーマ：「白老で見られるアイヌ民族の有用植物」

日時：10月3日（土）午後6時～8時

会場：アイヌ民族博物館映像展示室

講師：姉帯正樹（北海道立衛生研究所薬理毒性部薬用資源科長）

参加者：36名

* 白老周辺で見られる植物の中で、アイヌが食用や薬用として用いたものについて、スライドや実物資料等を用いながら解説した。また、講師の研究成果をもとに、植物の栄養価、成分等について科学的説明を加えた。

古式舞踊の公演

「アイヌ古式舞踊鑑賞会」

9月22日、追分町文化協会主催による標記鑑賞会が、追分町公民館で開催された。最初に当館の秋野茂樹学芸課長が「アイヌの歴史と文化」と題してアイヌ文化をやさしく紹介、その後当館職員が古式舞踊を披露。会の最後には当館職員の指導のもとに、参加者全員がムックリの演奏体験をおこなった。

「全国鯨の伝統芸能祭」出演

11月15日、「捕鯨を守る会」主催の標記芸能祭が、東京・両国の国技館で開催され、北は北海道から南は九州に至る各地から、鯨の芸能を伝承する団体が集まった。海外からのゲストとして、北米先住民族のヌチャヌフも招かれた。当館職員は、フンペリムセ（鯨の踊り）を含むアイヌ古式舞踊7演目を披露した。



国技館での古式舞踊公演

博物館資料展示貸出

「アイヌ文化フェスティバル」

財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構主催のアイヌ文化フェスティバルが、東京（10月20日 / 有楽町朝日ホール）、大分（11月11日・大分県立総合文化センター）の2会場で開催され、各会場のロビーで、服飾品を中心とした当館所蔵資料46点を展示した。大分では初のアイヌ民族資料展示ということもあって、熱心に資料に見入る一般市民の姿が多く見られた。

福岡県人権啓発情報センター特別展示

平成10年12月1日より同センターで開催された「第6回特別展～先住民アイヌの人々の今」に、当館所蔵資料48点を展示した。同展は、過去から現在に至るアイヌ民族・文化の姿をパネル展示と合わせて紹介するもので、平成11年1月31日で会期終了となる。

儀礼の実施

チブ（丸木舟）の製作とチブサンケ

9月初旬から約1ヶ月をかけて、伝承課男性職員がチブを製作した。材料のオオバヤナギは、長さ約9.4m、直径約90cmの大木で、完成した舟は約8.5mの長さとなった。10月

12日にはポロト湖畔でチブサンケ（舟下ろしの儀礼）を実施し、金色の美しいチブが湖に浮かんだ。



湖面上に浮かぶ新しい丸木舟

チセの建設

当館では、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構の委託を受け、チセを建設した。大きさは一家族が住める一般的なものを想定し、伝統的工法により釘などを使わず、全て自然素材を材料として用いた。10月31の地鎮祭からおよそ1ヵ月の作業を経て、11月25日には竣工式を迎え、一般に公開された。（詳細は本文2～5頁）

アイヌ工芸作品コンテスト入賞

8月8日から3日間にわたり、アイヌ文化振興・研究推進機構主催のアイヌ工芸作品展示会が札幌の京王プラザホテルで開催され、初日にはアイヌ工芸作品コンテストがおこなわれた。応募総数 174点の中から、当館伝承課職員の下記作品3点も入賞作品として選ばれた。

優秀賞：下河ヤエノアットウシ [額入りミニチュア]

入賞：野本リヨノエムシアッ（刀掛け帯）
新井田幹夫ノヘペレアイ（花矢）

平成10年度国際学術研究への参加

千葉大学文学部萩原真子氏を研究代表者とする、文部省科学研究費補助金国際学術研究「第2次在ペテルブルグ博物館アイヌ資料の民族学的研究」に、当館学芸員村木美幸が参加し、8月21日～9月12日、ペテルブルグのロシア民族学博物館にて、アイヌ民族資料の調査をおこなった。（詳細は本文6～7頁）

国際シンポジウム「岐路にたつ狩猟採集民」への参加

10月26日～29日、国立民族学博物館で開催された標記シンポジウムに、当館伝承課山丸郁夫が参加し、28日午後の討論会で「アイヌ民族博物館の活動」と題して、博物館の現状について発表した。

台湾先住民族との交流

当館では以前から台湾先住民族との交流を続けてきており、昨年12月には台湾原住民委員会設立1周年記念行事として開催された「世界原住民文化芸術祭」に参加した。今年は当館職員15名が12月1日～5日、台湾を訪れ、3日に台北の原住民順益博物館、4日には台東の九族文化村を訪問した。初めての訪問となった九族文化村は、敷地内に各部族の100年ほど前の家を移築再建し、一周するとそれぞれの特徴がよくわかるようになっている。家屋の周辺では製陶や木彫などの伝統工芸の実演も見られ、伝統料理の売店などもある。また、園内の「娜魯灣劇場」では、各部族の踊りを見ることができる。踊りの大半は、現代楽器を用いてアレンジされた演奏に合わせたもので、台湾でも評価の分かれるところがあるようだが、踊りそのものは見応えがある。その公演のあとに、特別に、当館職員がアイヌ古式舞踊を披露することとなり、一般の観客に混じった文化村の踊り手たちからもあたたかい拍手を受けた。



九族文化村での製陶の実演

「行政院原住民委員会設立2周年記念式典」

12月20日に開催された標記式典に、当館秋野茂樹学芸課長・山丸悦子伝承課長が出席した。式典にはカナダやニュージーランドな

ど各国の先住民族の代表が招かれ、式典前日には先住民族をとりまく諸問題についてのセミナーを開くなど、互いの交流を深めた。

資料受贈

* 寄贈者：二宮一朗氏

品 目：石杵（アミ族／台湾）

白老民族芸能保存会活動報告

「98 国際先住民の日記念事業 フォーラム・古式舞踊公演」参加

8月9日は国連の定めた国際先住民の日であり、毎年ウタリ協会主催による記念事業が道内各地で開催されている。今年白老町コミュニティセンターが会場となった。当日は台湾の先住民族ブヌ族のヨハニ・イスカカブット氏と、台湾政治大学の藤井志津枝教授をゲストに、講演会とパネルディスカッションがおこなわれ、当館秋野茂樹学芸課長がパネラーとして参加した。その後、鶴川民族芸能保存会と白老民族芸能保存会が古式舞踊を披露した。

「アイヌ伝統芸能鑑賞・国際交流の集い」

昨年発足した白老町の民間国際交流団体「SINCE '98」主催の国際交流の集いが、8月19日、当館ポロチセ（復元家屋）を会場として開催され、白老民族芸能保存会会員によるアイヌ古式舞踊が披露された。参加者は、白老町の姉妹都市であるケネル市（カナダ）から英語指導助手として来町しているトビン氏一家、町内にホームステイ中の台湾、韓国、アメリカ人留学生3人を含む約40名で、古式舞踊公演の最後には、参加者全員が輪になってイヨマンテリムセを楽しんだ。その後、白老観光センターに場所を移して立食パーティーが開かれ、白老民族芸能保存会会員も加わり国際交流の輪を広げた。



ポロチセでの古式舞踊公演

第10回白老チェップ祭参加

9月20日、第10回白老チェップ祭が白老港インカルミナル広場を主会場として開催された。午前中には、ウヨロ河畔で当保存会員がベッカムイノミ（サケを迎える儀式）を実施し、引き続いてアイヌ民族博物館所有のチブ（丸木舟）を用いて、一般参加者によるマレク（アイヌの伝統的な漁具）でのサケの捕獲体験をおこなった。祭りの最後には主会場でのイヨマンテリムセ体験もおこなわれ、一般参加者が加わった、大きな踊りの輪ができた。

アイヌ文化奨励賞受賞

白老民族芸能保存会は、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構の1998年度アイヌ文化奨励賞を受賞した。これは1970年の会結成以来の、海外を含めた活発な公演活動などが評価されたもので、10月20日に東京・有楽町の朝日ホールでおこなわれた贈呈式に、山丸和幸会長が出席した。



賞を受ける山丸和幸会長

アイヌ民族博物館だより No.40

発行：財団法人アイヌ民族博物館
〒059-0902 北海道白老町若草町2丁目3-4
TEL：0144-82-3914
FAX：0144-82-3685

THE AINU MUSEUM 1998. 12. 31

印刷：株式会社北海道機関紙印刷所
〒006-0806 札幌市北区北6条西7丁目
TEL：011-716-6141
FAX：011-717-5431